

ヨブ記一九章二五―二七節、マルコによる福音書一六章一―二〇節
二〇一〇年四月四日日本基督教団仙川教会復活祭主日礼拝

大串肇

婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。(マルコ六・八)

皆さん、マルコ福音書が報じているイースターの出来事は衝撃的な結末でした。愛する御子イエスのご遺体は安置されていたはずの墓の中は見当たらない、しかもその衝撃のニュースを伝えている若者は弟子たちに「ガリラヤに行け」、「復活した方に会える」という信じがたいメッセージを彼女たちに託したのであります。

皆さんだったらどうでしょうか。「震え上がり、正気を失い」、「だれにも何も言わなかった」。「恐ろしかった」それは無理もない、あの十字架の処刑の場面でさえ逃げ去らなかつた女性たちですら恐怖に恐れ、この復活の一報を誰にも伝えなかつた。沈黙と恐怖―イースターの朝、主イエスの復活を前にしてまたしてもここで立ちほだかっているのは、人間の弱さであり、不信仰なのです。

マルコ福音書最終部は二つの版で結ばれています。いずれも主イエスの復活の事情をマルコ福音書以外のマタイ、ルカ福音書や使徒言行録の諸々の記事から知りうる情報を付け加えており、マルコ福音書の元来の結びは八節までであつたというのが研究者たちの一致した見解であります。弟子たちに比べて彼女たちは十字架から逃げ去つた弟子たちに比べて英雄視されがちですが、彼女たちは信仰の達人ではなかつたのです。

しかしみなさん、女性たちは主イエスの復活の使信をペトロたちに伝えたのでしょうか。まったく無力さのただ中にイースターと福音のニュースは再び人間の罪の中に飲み込まれてしまう。信仰者と雖も、人々の前では―おそらく試練や迫害下にあつて―福音を公に口には出せない、沈黙せざるを得ない弱さと不信仰の現実を描き出すことでこの福音書は完結していたのであります。この福音書の読者であるキリスト教の共同体は恐れと沈黙の中に希望を見失っていたのでしょうか。疑問は残されたままであります。

この問いに応える前に、いくつか手掛かりがある。そのひとつがまさに女性たちに語られていた御言葉です。

さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。(七節)

この御言葉は命令であり、また主にお会いできるという約束でもあります。この約束の声はきつと実現する、そういう希望を暗示しています。はなはだ根拠のない、言いわけでも気休めでもありません。ではなぜそうなのか。注意深くこのマルコ福音書を読みますと、その希望の根拠がこの短い聖書の記事に書かれているのが見えてくるのです。そこで一節をお読みいたしましょう。

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買つた。

マルコ福音書一六章は、前章の終わり、つまり十字架の最期の死そして埋葬を見届けた女性たちをここに登場させています。彼女たちこそ、ガリラヤから主イエスに従い、十字架の証人となつた人たちであり、ここでは主の復活の証人となるという役割が与えられています。彼女たちは英雄ではありません。ナザレのイエスこそ、十字架で殺害された主であり、その十字架の主イエスこそが蘇られたのであることを証しするために用いられているのであります。主イエスのご生涯、十字架・復活がバラバラではなく、一人の人格の上起きた、一つの出来事であることにとても大きな意味があるのであります。

そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行つた。(二節)

「週の初め」とはユダヤ暦では日曜日のことです。安息日は土曜日であり、主イエスは金曜日に処刑されましたから、「二日目に」「三日後」に復活すると主イエスは三回も生前予告していた、その預言はまさに成就したのであります。十字架復活は、肉体の蘇生に三日かかつたというような経費であるとか、労働時間であるとか、そういう人間のなしうる作業工程ではなく、神様がこのようにして人類の救いのご計画をあらかじめたてられ、それを御力によつて自ら実現させたのであるというメッセージでもあるのです。ですから、それはまさに奇跡であり、神の御業であるのです。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていたのであります。巨大な石が既にわきへ転がしてあつたのを恐れたとありますように、強大な石が取り除かれ墓に入る事ができたこと自体が、復活がまさに神さまのなされた奇跡であることを物語っているのです。極めつけは復活の使信を告げるべく遣わされた「若者」(天使)のメッセージであります。五―七節です。

墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたをたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」

新共同訳聖書は、主イエスは「復活なさった」と訳しておりますが、*ἐγειρο*（＝「起す」）の受動態でして、そのまま直訳すると主イエスは「復活させられた」となるのです。つまり、主イエスを死者の中から復活へと移されたのはほかならぬ神さまご自身であり、まさに十字架復活が神さまの御業であるのです。「ナザレのイエス」。人間イエスの結末は悲惨な最期でありました。しかし死と滅びが最期の言葉ではなかったのです。言いかえれば、彼の運命は変えられたのであります。そして彼の新しい命こそ、死と滅びゆくわたしたちの運命をも変える力になる。これがイースターのメッセーであります。

なぜならば、主イエスの十字架と復活が神さまの愛の出来事であるように、神さまはわたしたちがただ苦しみを受け、死んでゆき滅んでしまうことを望んでいないからであります。その神さまの愛の奇跡がガリラヤで起こるといいます。

みなさん、ガリラヤに行きなさい！という意味があるのでしょうか。先ずこの命令がペトロと弟子たちに向けられていることに注目したいのです。ペトロと弟子たちこそ、主イエスが逮捕されるや否や逃げ去った人たちでした。かれらは主イエスのもとに一番近くにいたはずですが、まったく無力でした。そして主イエスを本当の意味で理解していなかったのです。しかし今、新しき運命の転機を迎えるのです。つまり、ここには彼らの不信仰を赦す神さまの愛があります。彼らの罪を赦し、新たに受け入れ、ガリラヤで再結集するのであります。ガリラヤこそ、マルコ福音書にとつて故郷であり、地上のイエスが歩まれ活動した重要拠点でした。そして同時に弟子たちが最初に主イエスに出会い、招かれ、従ってきた信仰の原点とも言うべき場所なのです。その信仰の原点に帰ることが赦される。神さまの愛と赦しの世界へ再び招かれている。この招きの声こそ、「ガリラヤに行きなさい」という声なのです。

皆さん、わたしたちにもこの招きの声が今朝向けられているのです。わたしたちにとりまして「ガリラヤ」とはどこか。それは主イエスとの最初の出会いの場であります。信仰を告白し洗礼を受けたことを意味します。そして今わたしどもにとりましてはこの仙川教会の礼拝なのであります。主イエス・キリスト御言葉と聖餐の場に再結集され、神の愛と赦しの奇跡に与れる。わたしどもの死すべき運命がまったく新しい命の力によつて変えられる。これが今朝わたしどもその奇跡の恵みに加えられております、イースターの出来事なのです。

しかしみなさん、最後に残しておいた問いがあります。この大事な十字架と復活の使信を女性たちは彼女たちのついでいばん身近な弟子たちに、伝えるべき隣人に伝えたのでしょうか？ この問いはそのままイースターの礼拝に集うわたしたちにも向けられているとは言えないでしょうか。

福音宣教の前に不安と恐れそして沈黙が立ちほだかっています。しかしなぜここに希望があるのか。一つのヒントがあります。それはこの箇所には書かれてはいません。マルコ福音書全体を読み直してみますとき、沈黙は必ず破られる。そういう箇所がいたるところで出てくるのです。とりわけ癒しの奇跡物語では主イエスによつて癒された者が沈黙しなさいと命じられているにもかかわらず広がっていく、そしてその町中に、その地域全体に主イエスの福音が広められていった。沈黙は破られる。妨げられても、妨害されても、不安におびえているその暗闇の中にももう黙っておこうと思つていても、やめられない、とまらない、神さまの愛の熱情がわたしたちのうちの燃え上がるのです。炎はかつて預言者エレミヤにあつては主の名を口にすまい／もうその名によつて語るまい、と思つても／主の言葉は、わたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。（エレミヤ書二〇・九）と言わしめた炎であり、ペトロや弟子たちが伝道した中に、やがて使徒パウロの中に燃え上がった炎であります。また一五〇年前決死の思いで日本に福音をのべ伝えた宣教師たちの心に、そして四五年前信濃町教会から地の果てを目指して船出した仙川伝道所の信徒と牧師のうちに燃え上がった炎であったのです。不安と恐れに打ち勝つ力を得て、あの女性たちが口を開かなければ起きなかつた奇跡の出来事であります。言いかえれば、今朝私どもの礼拝も洗礼式も、この神さまの愛の奇跡が彼女たちのうちにも弟子たちのうちにも起きたことを豊かに証しているのではないのでしょうか。わたしたち人間は自らの力では十字架のつまずきを超えることはできません。もしも主イエスの十字架と復活がなければわたしたちの運命は不安と恐れ、無力と沈黙、死と滅びであります。しかしわたしたちには主イエスの復活によつて神さまの愛と赦しに絶えず立ち帰り、その交わりの中を生きることが許されたのです。新しい命に生きることができるとは、この命の喜びを伝えたい。福音を証したいのです。その炎を誰も抑えることができない、病も死もなにもも止めることができないのです。わたしたちの先を主イエスが歩まれるからであります。その導きと招きを信じて歩んでまいりましょう。祈ります。